

博士論文の要旨および 論文審査結果の要旨

氏名	烏仁其其格
学位の種類	博士（比較文化学）
学位記番号	文博甲第6号
学位授与の日付	2009年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	『牧業者への助言』について ——モンゴルにおける遊牧生活の教訓書——
論文審査委員	主査 原山 煌 教授 副査 小池 誠 教授 副査 Philip Billingsley 教授

<博士論文の要旨>

『牧業者への助言』について

——モンゴルにおける遊牧生活の教訓書——

烏仁其其格

この論文は、『牧業者への助言』という遊牧生活の教訓書を通じて、モンゴルにおける遊牧がどのように営まれていたのか、その実態を明らかに

したものである。

第1部では、『牧業者への助言』が作られるに至った経緯、著者、その内容について検討する。

はじめに、モンゴルにおける遊牧を取り上げる意義について述べる。1990年代初め頃にモンゴルでは民主化が始まり、市場経済への移行が実施された。それ以降モンゴル遊牧民は自立し、なによりも家畜を増やすことを第一目標とした。その結果、家畜頭数は増加したが、1999-2001年にかけて、干ばつ、大雪、低温などの自然災害に見舞われ、牧草や飲み水の不足ともあいまって約1000万頭の家畜が斃死した。また家畜が都市付近、水源の周辺、道路に沿った交通の便利な放牧地に集中し、過放牧が引き起こされたため、放牧地の荒廃を招いている。さらに遊牧は市場経済にうまく機能できず、遅れた生業、将来の展望がないという批判にさらされている。2003年から一部の遊牧民を定住させ、集約的畜産を進展させるという遊牧の停止を試みる政策も打ち出されている。しかし遊牧はこのような厳しい現状に置かれているとはいえ、2001年の統計によると、なお国民所得の3分の1を生産し、対外貿易の40%を提供している。2008年には国民所得の18.8%を生産し、明らかに国の基幹産業の位置を占めている。長きにわたって維持された遊牧の歴史を簡単に否定していいのだろうか。今こそモンゴルにおける遊牧が現在まで持続されてきた理由と将来への可能性を探る必要があると思われる。

続いて、モンゴルにおける遊牧の実態を明かす切り口としてホト・アイル (qota ayil 居住集団の意味) に注目する。モンゴルは典型的な大陸性気候を有し、必然的にその環境が農耕に不向きであるため、古来遊牧が主たる生業として営まれてきた。モンゴルの遊牧は、ウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ラクダの五種類の家畜の群を従え、水と牧草、および家畜に不可欠な適当な塩分などを与える放牧地をめくりながら展開している。その暮らす

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

場所には、ゲル（ger 家の意味）と呼ばれる住居が立てられ、いくつかの
アイル（ayil 世帯の意味）が集まり、習性の異なる五畜の群を保有し、そ
の放牧や管理に協力しあっている。このようないくつかの自立した世帯の
集まりがホト・アイルと称され、それを基本単位としてモンゴルの遊牧が
行われているのだ。

ホト・アイルを中心としたモンゴルの伝統的な遊牧は、社会主義体制確
立以降もそのまま継承され、国からのさまざまな支援措置を受けながら促
進され、国の経済を支えていた。1959年に牧民個人の家畜を社会の所有と
し、牧民個人による経営を、ネグデル（モンゴル語の *ködege aju aqui-yin
nigedül* の略称。農牧業協同組合の意味）と称する集団経営へと移行させ
る政策が実施された。こうして遊牧は国の指導下に推進されるようになる。
したがってネグデル時代にホト・アイルは表舞台に出なくなった。ネグデ
ル体制下では、複数世帯が集まって最小単位としてソーリ（*sayuri* 基礎の
意味）が構成され、それをもとに遊牧が営まれていたのである。ソーリは
世帯が集まり、協力して遊牧を営むという点で、ホト・アイルを受け継い
だものといえる。1990年代初め頃に社会主義体制の崩壊、それに伴うネグ
デルの解体が起こり、牧民の間でホト・アイルを組む動きが見られ、遊牧
が再びホト・アイルのもとに行われるようになった。

このような歴史的背景を踏まえて、まず第1章では、『牧業者への助言』
の解題を行い、モンゴル遊牧民がどのように遊牧を営んでいるのかを述べる。
第1節ではモンゴルが地理的にハンガイ（*qangyai* 山岳地帯の意味）、
ゴビ（*yobi* 不毛の地の意味）、ヘルタル（*keger-e tal-a* 平原の意味）とい
う3地域に区分される慣行に基づき、多彩な自然に応じて展開されている
遊牧の多様かつ複雑な知識や技術の概要を示す。ユーラシアからアフリカ
にかけての広大な乾燥地帯は、昔から遊牧生活の主要な舞台になってきた。
そこには現代も多数の遊牧民が広く分布している。彼らには、牧畜に生計

を委ねる共通性が見られるが、それぞれの地域の自然、社会などの諸条件に応じた多様な特徴も認められる。モンゴルでは、他の地域の遊牧と比べ、もっとも多い5種類もの家畜が飼養され、それぞれの産物が生活のさまざまな用途に徹底的に利用され、しかもそれによって衣食住の需要をほとんど満たす独特な遊牧が行われているのである。

厳しい自然環境のもと、複雑な遊牧生活を維持して行く必要から、モンゴル遊牧民の間では遊牧生活を営む知識を重んじて後世へ伝えようとする伝統があった。19世紀半ば、『ト・ワンの教え』と呼ばれる文書が作られ、遊牧生活の教訓書として遊牧民の生活を立て直そうとしたことが知られている。そして『牧業者への助言』も遊牧民を技術面から指導し、牧畜生産を拡大させようとした。この2つの著作は、約1世紀も離れた時代において、それぞれ封建、社会主義というきわめて異なる社会体制を背景に、牧民の生産意欲を刺激し、遊牧の伝統に基づいてその知識や技術を普及させ、牧畜業の発展を図ろうとした共通点を有しているのである。

『ト・ワンの教え』では放牧地の選定やその利用法、放牧の仕方、品種の改良法、雪害の具体的な対策などの当時の遊牧生活全般にわたって日常の細かな注意事項にいたるまでのポイントが簡要に示されている。そこには『牧業者への助言』の内容と類似する点が多く取り上げられている。

『牧業者への助言』では季節の極端な変化、地形、植生などのモンゴルの自然条件を十分に把握したうえで、ハンガイ、ゴビ、ヘルタルの3地域それぞれにおける遊牧について検討されている。そのような枠組みのもと、五畜のそれぞれの性質、習性などによる管理放牧、牧草の蓄積、また家畜から得られる畜産物の適当な利用など、遊牧の多岐にわたる技術が集成されているのである。

第2節では、『牧業者への助言』の著者であるサムボーについて述べる。彼はモンゴル人民共和国、およびモンゴル国においてすぐれた政治家と高

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

く評価されているが、すぐれた牧民でもあった。サムボーは、1930年にエムヌゴビ、トゥブ県知事、37年に駐在ソ連大使、52年に外務省代理大臣などを経て、54年から6期連続で人民大会幹部会議長を務め、国民経済、文化の多様な部門に関わる幅広い活動を展開させた。幹部会議長という象徴的な役職に置かれ、実権を持つことはなかった。サムボーが人民共和国時代の激動する政治状況を生きぬけたのは、このような地位にあったからではないかといわれている。

その一方でサムボーは遊牧に関するさまざまな著作を書き残し、牧畜業に対して大きな貢献をしたと評価されている。彼は清朝末期、活仏君主制自治時期の封建勢力の支配下に置かれた貧しい牧民の家に生まれ、家畜を相手にして育ち、6歳からすでにゲルの近くの放牧地で子畜を放牧したり、家畜囲いを掃除したりして両親を手伝い、10歳になるとヒツジ・ヤギを放牧し、さらに進んでラクダやウマの放牧を経験した。約20年間、遊牧の現場でさまざまな牧畜労働の実践を繰り返し、一人前の牧民として成長していった。

サムボーの伝記によって、モンゴル遊牧民は幼いときから両親の教え、近隣する人々との交流、さらに遊牧社会の互助関係に支えられ、厳しい自然の中に複雑な遊牧生活を維持してゆく能力を体得し、自身の成長を遂げていることが明らかになった。

第2章では、モンゴルの20世紀に起こった牧畜業の集団化と、社会主義体制の放棄という大変動を区切りとして、遊牧に対する政策の変化を3時期に分け、それぞれの時期におけるホト・アイルの有様、遊牧技術の活用、国の遊牧に対する施策の3点に着目し、社会体制、産業構造などの大きな変化が遊牧にどのような影響を及ぼしたのかを論じる。

第1節では、集団化以前の遊牧の状況を分析する。小長谷の聞き取り調査によると、ミンジュールは彼の出身地のハンガイ地域に位置するアルハン

ガイ県において、世帯の人数によって、ホト・アイルを組む世帯の数が異なり、婿が多ければ、10の世帯が1つのホト・アイルを、子供が少ない場合、4-5の世帯によって1つのホト・アイルが構成されるという。さらにホト・アイルを組んで家畜をまとめ、各世帯が順番を決め、2日おき、3日おきに担当すると回想している。集団化以前、モンゴル遊牧民は親族や姻族の間でホト・アイルを組み、その内部では各世帯がウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ラクダの五畜を種類ごとにまとめ、それぞれの群を分担したり、季節的な牧畜作業を共同で行ったりして、それぞれの生活生産を成り立たせていた。

その一方、ソ連と中国の支援のもとモンゴルで社会主義建設が促進されるのを背景として、牧畜業の発展も重要な目標の1つとされた。国は牧民を牧畜業に従事するように奨励したり、優秀牧民の家畜放牧のすぐれた方法や経験を牧民へ普及させたり、さらに遊牧のリスクを克服するために干し草や飼料の備蓄、畜舎の設置、獣医の治療などを行った。その結果、家畜頭数が960万頭から2300万頭に増加し、現代モンゴルの遊牧の基礎を築いたのである。

第2節では、約30年間続いたネグデル体制によって進められた遊牧について検討する。1959年には牧民の99.6%がネグデルに加入し、家畜の73.8%がネグデルの所有となり、およそ389ものネグデルが形成された。79年に行政区域の郡と一致させて255のネグデルに再編され、社会主義体制が崩壊するまで存在していた。

伝統的な遊牧は、牧民個人が家畜の管理放牧、季節移動の時期と場所といった自分の生活生産を自らで決めるという様式である。集団化につれて、一定数の私有が認められたものの、ほとんどの家畜がネグデルの所有となった。ネグデルでは1種類の家畜を年齢別、性別などに細かく分類して畜群が構成される。たとえばウシは、乳ウシ、去勢ウシ、種ウシ、2歳牝、

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

2歳牡というように五つの群に分類され、分業・専業の牧畜が進められたわけである。牧民は指定された牧民とソーリを組み、たとえば250頭の当歳ヒツジ、500頭の牝ヒツジ、100頭のウマなどのそれぞれの放牧や、畜産物の生産の一部を担当することになった。ネグデルは牧民の労働に対して基本給を支給したり、超過達成に応じて追加金や名誉称号を与えたりした。

しかし牧民にはネグデルの家畜からの肉、毛、皮革、乳などの産物を利用する権利がなかった。牧民の衣食住の原材料が限られ、「自家の茶に入れる乳も残らず、ヒツジを食べるなら代金を払わなければならぬ」なり、衣服や靴、フェルト、鞍などの生活必需品の製作のための毛皮や毛が不足し、牧民の生活にさまざまな不便が生じた。1-3世帯からソーリを構成して協力するという点から、ホト・アイルを受け継いだといえるものの、遊牧民の多岐にわたる伝統的な知識や技術が活用される場面は失われ、遊牧民の遊牧を営む自主性が損なわれ、とくに若者の牧畜離れを招くこととなった。

またネグデル体制においては、家畜囲いや小屋の設置、飼料や干し草の生産・蓄積、井戸の整頓、病気予防や獣医の治療などさまざまな措置が進められ、冬・春の家畜頭数の減少や災害への対処、放牧地の効率的利用などのプラス面もあった。遊牧のリスクに対して社会主義時代にさまざまな支援を講じたのは、ホト・アイルの内部で蓄積された伝統的な知識に基づき、遊牧の自然に対する抵抗力の不足が目され、マイナス要素を改善するための新たな工夫でもあった。

第3節では、民主化以降の遊牧が直面した問題について指摘する。2008年の統計によると、いまだ36万ほどの牧民が遊牧生活を営んでいる。しかも牧民の間では親族や姻族、知人などでホト・アイルを組む動きが見られる。民主化以降の調査によると、各地におけるホト・アイルを構成する世帯の数はそれぞれ異なっている。ハンガイ地域ではホト・アイルの構成世

帯が多く、10世帯にも達するが、ゴビ地域では2世帯から成るホト・アイルがほとんどであった。またどの地域でも季節の変化によって、夏に水源や牧草の豊かな場所にホト・アイルが集中し、冬には分散してゆく。遊牧の特徴や、自然環境へ配慮していることが見て取れる。さらにホト・アイルの内部では家畜を種ごとにまとめ、世帯を単位として当番制で家畜の放牧に協力し、とくに各世帯は夜にヒツジ・ヤギを入れる1つの家畜囲いを利用する。またヒツジ・ヤギの搾乳や、冬・春営地における家畜囲いの設置などの短時間に大量の労働力を必要とする労働には近隣するホト・アイル同士が協力する。民主化以降、自然条件や季節変化、労働力の配置などに加え、教育、医療などの社会的需要が絡み、ホト・アイルを組む理由はさまざまであると指摘されている。しかし牧民は「単独で宿営するのは非常に厳しい」というように協力することの大切さを意識し、可能なかぎりホト・アイルを構成させているのである。

遊牧は再びホト・アイルのもとに営まれるようになったが、自然災害や過放牧などの問題に直面し、大きな被害を受けた。その原因は国が遊牧のリスクに対してネグデル体制のような組織的な支援を充分に行なえなくなったことにある。しかも民主化以降に牧民の人口が増加したが、実際には遊牧の知識や技術の欠乏、経験の不足などの問題点があり、被害に拍車をかけたことも示された。

ところでモンゴル遊牧民はゾド（jud モンゴルの独特な自然災害）や干ばつに対抗する知恵や技術を持っており、『牧業者への助言』では2つの対策が示されている。夏・秋にかけて家畜に十分な体力をつけさせることと、冬・春のゾドや干ばつのときに移動して避難することである。しかも災害のときにそれを実際に活用し、被害を抑えた牧民も見られたという。牧民は自ら対策を立てて自然災害に対処していけることが分かる。

また自然科学的研究からは、モンゴルにおける遊牧の特徴ともいえる五

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

畜の放牧と、移動の効果が評価された。モンゴルにおける遊牧は、五畜にそれぞれ独自に食べる牧草を与えることによって、植物の多様性を保持し、草原を持続的に利用してきた。『牧業者への助言』ではハンガイなどの3地域にできるだけ五畜を揃えて放牧することが提唱されている。また季節の変化によって、自然の3地域における移動回数を地域別に言及している。ハンガイ地域では月に1度以上移動し、ゴビとヘルタル地域では2度以上移動するのがよいとされた。こうした移動はネグデル体制下に盛んに行われていた。民主化以降は移動をしなくなったため、放牧地の荒廃が進行しているという。牧民の季節による移動、および同じ季節内の移動は過放牧を防いだのであった。遊牧はモンゴル高原の自然環境を千年以上も保護し、いわば環境保全の役割を果たしてきたのである。

第3章では、『牧業者への助言』の内容について、まず第1節に五畜から得られる多種の畜産物がモンゴル遊牧民の衣食住に多様に利用されている状況を記述する。『牧業者への助言』と『ト・ワンの教え』はどちらも、家畜から得られる毛皮・皮革、毛は衣服や靴、住居に利用され、肉、乳などの産物は食糧を提供していることに言及し、さらに効率よく利用するように提唱している。いうまでもなく、五畜はモンゴル遊牧民の衣食住に原材料を提供し、今日に至っても遊牧民の生活を支え続けているのである。

第2節では、検討する項目を乳利用、ゾドへの対処、家畜の使役、家畜の繁殖の4点に絞り、第2部に提示する『牧業者への助言』の内容を参照しながら、『ト・ワンの教え』と比較し、さらに今日行われている遊牧の実践例をも加えて考察する。

『牧業者への助言』と『ト・ワンの教え』はどちらも、遊牧技術について同様な注意点を示していることが明らかになった。たとえばウマやラクダで旅をするときは、それぞれの体調を保持するために、馬具や荷駄による怪我、季節の寒暖による病気などに注意するように、ともに提唱してい

る。また暖かい季節に子畜が生まれるように交配時期を調整したり、子畜に定時定量に授乳させたり、寝場所をあてがうなど、家畜の交配・出産時期や、子畜育成について同様なポイントが配慮されている。こうした注意は今日も遊牧の現場で同じく注目されている。民主化以降、各地で行なわれた調査では、乳搾りの時期や回数、家畜の交配・出産時期などが配慮され、家畜の世話をきちんとしようとしている。

以上のように、各章それぞれの論述によって、モンゴルにおける遊牧がどのように長きにわたって持続されてきたのかが明らかになった。ホト・アイルが一貫して存続し、遊牧の持続に中心的な役割を果たした。ホト・アイルはモンゴルの自然環境、季節の変化に柔軟に対応しており、それを組むことによって自然災害に対処し、遊牧の自然に対する抵抗力が向上し、その発展につながる。またその内部では情報の交換、技術の伝授によって、牧民が遊牧の技術、共同労働の方法などのさまざまな分野にわたる知識を体得し、牧民の育成が促されてゆく。さらにホト・アイルでの生活、労働を通して遊牧の技術が牧民の間で共用されるのである。

第2部では、『牧業者への助言』のモンゴル語テキストの全内容のローマ字転写と訳を提示する。モンゴルの遊牧生活は、5種類もの家畜を飼養し、それぞれの産物を生活のさまざまな用途に徹底的に利用し、しかも生活需要を満たし、他の地域に見られない独自性があるのである。『牧業者への助言』の内容はモンゴルにおける遊牧生活の全体の有様を総合的に示したものである。たとえばヒツジ・ヤギの日帰り放牧について、季節、地形、気象、放牧地などのさまざまな要素に配慮して行われる細々とした放牧仕方が見て取れる。それにとどまらずウマ、ウシ、ラクダの放牧についても同様な注意が具体的に示されている。またモンゴルの独特な自然災害であるゾドに対処するさまざまな方法が地域別に示されている。つまりモンゴル遊牧民が牧畜労働についてどのように、どこまで細かい注意を払っ

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

ているのか、より具体的に理解することができるのである。このような理由で『牧業者への助言』の全内容を提示する必要があるのだ。

『牧業者への助言』は話しかけるような独特な文体がとられ、またモンゴル語自体の主語を省略するなどの特徴が顕著で、さらに著者の同じ言葉を何度も繰り返すなどの言葉使いの特徴も見られた。日本語への翻訳にあたって、可能な限りの解釈は行なったが、モンゴル語原文での確認ができるように、そのローマ字転写をつけることにした。

参 考 文 献

- 小長谷有紀 2003 『モンゴル国における20世紀——社会主義を生きた人々の証言』『国立民族学博物館調査報告』41
- 萩原守 1999 『『ト・ワンの教え』について——十九世紀ハルハ・モンゴルにおける遊牧生活の教訓書』『国立民族学博物館研究報告別冊』20 p213-285

<博士論文審査結果の要旨>

『牧業者への助言』について

——モンゴルにおける遊牧生活の教訓書——

審査委員 主査 原山 煌

審査委員 副査 小池 誠

審査委員 副査 Philip Billingsley

1. 論文の課題と研究方法

この論文は、長きにわたってモンゴル高原において展開されてきた遊牧経済の過去と現状を検討し、今後、遊牧という経済形態が生き残ることができるのかという課題に新たな視点を提供しようとしたものである。

この論文が構想された背景には、2001年、モンゴル国首相のエンフバヤルが雑誌インタビューで、モンゴルが生き残るためには遊牧を捨てなければならない、と発言して大きな話題になった出来事があるという。モンゴル国の将来構想をこの見通しのもとに具現化する動きは現に始められているが、果たしてエンフバヤル首相のこの見解は正しいのか、また遊牧を捨てるという決断は妥当なのか、専門家の間では現在も論議がたたかわされている。

著者である烏仁其其格は、この難問に取り組むに際して、20世紀中葉に、モンゴルの遊牧生活に対して貴重な提言を行なったことで広く知られる『牧業者への助言』と呼ばれる著書に注目し、同書中に見られる具体的な記述を、過去・現在の同地の遊牧と照合しながら考察を進める。

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

まずモンゴル高原で行われている遊牧の概況を述べ、その特徴を列挙する。モンゴル高原は、高地（モンゴル国の平均標高は、約1,500メートル）・高緯度・内陸部に位置するという自然条件に規定されて、寡雨・気候の急激な変化・長く寒い冬などの厳しい表情を備えている。そのようなモンゴル高原は、「ハンガイ」「ヘルタル」「ゴビ」の3地域に大別される。山岳や森林が目立つ北部のハンガイ地域、ゴビ沙漠を主要な指標とする南部のゴビ地域、そしてその中間に広がるヘルタル地域（草原）である。モンゴル高原の遊牧は、「五畜」、すなわちウマ・ヒツジ・ヤギ・ウシ・ラクダを放牧の対象とするが、それぞれの地域にもっとも適応する家畜を見定めて5種の所有比率を決めるのである。

こうした背景のもと、著者は空間（地域）的、時間（歴史）的にモンゴル高原における遊牧を分析する。その際気づかされるのは、現代の遊牧についての様々な学術調査（フィールドワーク）は多く見られるものの、20世紀初め以前のその種の成果を求めることは極めて困難だということである。しかし、現在行われているその地の遊牧は、多種多様な先人たちの経験の上に成り立っているのである。

そのような先人の知恵が具体的な形を取った例が少数ながらある。著者は、そのなかでも特に情報量の多いサムボアの『牧業者への助言』に注目し、検討の主な材料としたのである。サムボアの著書は、遊牧全般について、細部にわたって具体的にアドバイスをを行っているので、烏仁其其格は同書の日本語への全訳をおこない、論文のなかで検討する具体的項目についてのサムボアの直接・間接の助言を遺漏なく参照できるようにした。

この論文は、上記のような方針のもと、20世紀のモンゴルの遊牧の移り変わりを、①清朝治下 ②社会主義体制下 ③自由主義体制の3期に区分して各時期の特徴を考察するが、遊牧社会に内在する要素として「ホト・アイル」に注目する。モンゴルの遊牧社会では、数所帯がまとまって形成

されるホト・アイルという最小の組織が遊牧経済を展開する際の基盤となっている。20世紀の激しく変動する政治社会状況のもと、モンゴルにおいてホト・アイルはどう受け継がれてきたのか。この点も烏仁其其格の重要な観点の一つである。

上記のような枠組みを設定して、著者は、さらにモンゴル高原の遊牧を、①乳利用 ②ゾド（自然災害）への対処 ③家畜の使役 ④家畜の繁殖、といういずれもモンゴル高原における遊牧経済のありかたを考えるうえで特に重要な項目について考察を展開する。

2. 論文の要旨

まずこの論文の構成を目次によって概観し、つぎに順を追って内容を紹介することとする。

第1部 『牧業者への助言』について

はじめに

第1章 『牧業者への助言』とその著者

第1節 『牧業者への助言』の解題

第2節 サムボーの伝記

第2章 モンゴルにおける遊牧

第1節 伝統的な遊牧の維持

第2節 ネグデル体制下の遊牧

第3節 民主化以降の遊牧

第3章 『牧業者への助言』の内容の検討

第1節 モンゴル遊牧民の衣食住

第2節 『ト・ワンの教え』の遊牧に関する内容との比較

1 乳利用

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

- 2 ゾドへの対処
- 3 家畜の使役
- 4 家畜の繁殖

おわりに

注

第2部 『牧業者への助言』のモンゴル語テキストの全内容のローマ字転写および訳・注

参考文献

- 附録1 サムボー及びモンゴルに関する年表
 - 附録2 モンゴル国の行政区画地図
 - 附録3 サムボーの人民大会幹部会議長だった時期の活動
 - 附録4 『牧業者への助言』に提示された植物一覧表
 - 附録5 『牧業者への助言』に載せられた写真資料のタイトル
- 本論に載せた表及び図

この論文は全2部から構成され、第1部で考察が行なわれ、第2部は『牧業者への助言』の全訳からなる。第1部の考察においては、第2部の全訳から適宜引用・参照を行ないながら論が進められるが、全訳であることから参照部分のコンテキストが確認できるようになっている。

モンゴル高原には一望千里の大草原というイメージがあるが、実はそうではない。同地の自然環境を概観すると、北部はシベリアのタイガの最南部を形成する山岳森林地帯（ハンガイ地域）、南部はゴビに代表される砂漠がちの地帯（ゴビ地域）が展開し、その間にモンゴルの遊牧の舞台となる草原地帯（ヘルタル地域）が広がる。

厳しい自然条件のもと、各地域において、どのように遊牧を行なうのかということには、複雑な判断が求められることになるのである。

「はじめに」においては、1990年代からの民主化による遊牧の一大変化を踏まえて、いまその地の遊牧経済の状況をしっかりと見据える必要性が述べられる。この論文において考察の対象となる時期は、20世紀全般、すなわち最後の中華帝国清朝の支配下にあった時期、社会主義体制のモンゴル人民共和国時期、そしてソ連崩壊の波を受け自由主義国に変貌して今日にいたるモンゴル国の時期、に3分される百年間である。モンゴル人民共和国時期には、遊牧の現場は、ソ連における集団農場方式をまねたネグデルと呼ばれる組織への再編が断行された。従来遊牧のあらゆる場面に、ホト・アイル——アイルとよばれる世帯がいくつか寄り集まって形成される遊牧の最小単位——というかたちで対処していた遊牧民は集団化され、与えられた分業を担当するに過ぎなくなった。

その時期を経て民主化が実現すると、ホト・アイルは再び姿を見せるのであるが、一方で自由化にともなう経済的大変動から遊牧経済自体も激変をこうむり、今後の展望はなお見定めがたいのが実情である。前記大統領の衝撃的発言はこうした不安を反映したものと言える。

このような現況にある遊牧は、今後どうなっていくのだろうか。烏仁其其格は、モンゴル高原の遊牧の主要な場面は20世紀の状況を追うことで概しておさえられるとの見通しのもと、大きな変動を含みもつ百年間の各場面を詳細に分析して行くのである。

「第1章『牧業者への助言』とその著者」では、まず、この論文で中心的役割を果たすことになる標記著書の解題がおこなわれる。同書の正式書名は「牧畜経済においてどのように働くのかについて牧民に与える助言」であるが、この論文では、1960年代に同書を紹介したラティモアにしたがって『牧業者への助言』と略称する。同書は、1945年にウランバートルにおいて、ウイグル式モンゴル字（旧文字あるいは縦文字などとも呼ばれる）表記で刊行されたのであるが、21世紀になってもキリル文字（いわゆるロ

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

シア語アルファベット)表記に直した再版が出版されるほど広く、長らく同地の牧民に親しまれてきた実用書である。モンゴル高原における多様な遊牧現場に、それぞれ過不足なく適用できる内容の細かさを備えており、遊牧技術の専門書といわれるほどである。前述のモンゴル高原の3地域の特徴をしっかりと踏まえて、季節ごと、それぞれの家畜ごと(牡牝別・年齢別)に、なすべき作業へのアドバイスが具体的かつ詳細に述べられている。

次にサムボアの経歴が述べられる。熟練した牧民の子に生まれたサムボアは、幼少の頃より父から牧民として知るべき多様な教えを受けただけでなく、封建領主のもとでの苛酷な労役提供を通じて、父以外の牧民からの知識を得ることもできた。モンゴル人民共和国が成立すると、サムボアは政治家としての頭角を現わし、駐ソ連大使、人民大会幹部会議長などの要職を歴任するが、折にふれて自らが持つ遊牧に関する豊富な知識を牧民に伝授することを惜しまなかった。『牧業者への助言』は、斯様なサムボアの業績の集大成とも言うべきで、全国の特に優秀な牧民たちからの聴き取り調査を行なった際、サムボア自身の持つ知識をも加えてまとめられたのである。同書が、現場ですぐに役に立つ手引書となった所以である。この論文では、サムボアの没後刊行された牧民時代の彼の回想談から、清朝末期のモンゴル高原における遊牧に関する部分を紹介しているのが注目される。

なお、烏仁其其格は、サムボアの書以外にもこの種の教訓書はないかと考え、清朝末期の19世紀後半に、モンゴル高原の東端に位置する旗(当時の行政区画 モンゴル語ではホショー)を治めていた封建領主ト・ワンによって作られた『ト・ワンの教え』の遊牧についての記述を提示した。モンゴル王侯としてのト・ワンが、領内の牧民の生活全面にわたって教え、諭すという体裁をとるその著述には、具体的な遊牧技術についての項目も

当然含まれていた。『ト・ワンの教え』をいわば補助線として用いることによって、19世紀以前の遊牧の具体的な状況をも踏まえることができるようにしたのである。

この論文は、上記2つの著述の叙述内容に、古来モンゴル高原で展開されてきた遊牧経済の過去・現在の状況を照らし合わせて考察しようとする。

「第2章 モンゴルにおける遊牧」においては、現代モンゴルの遊牧を考える場合に看過できない社会主義時代の遊牧経済のありようを考察している。この時期、保有家畜総数は、200-250万等頭程度で推移するが、遊牧現場では大きな構造的変化が見られた。上記ネグデルの導入である。従来、アイルと呼ばれる世帯がいくつかまとまって形成されるホト・アイルが遊牧経済を展開する場合の最小単位であった。単一所帯ではまかないきれないまとまった労働力を要求する仕事、たとえばある決まった時期に集中する去勢、交配、出産、剪毛、オオカミ狩りやその他の狩猟、冬の時期に突発するゾド（自然災害）への対処などには、ホト・アイルという経営形態は最適であった。各世帯間で遊牧についてのさまざまな知恵が交換され、遊牧を円滑にすすめるための経験が深まっていくのである。ところがソ連の集団農場方式にならったネグデルでは、大規模になった組織のもと、遊牧の各作業が分割され徹底した分業化が推進されたのである。従来のホト・アイルで交換されてきた遊牧全般にわたる総合的な知恵は、このようなシステムでは継承できなくなる。烏仁其其格は、ホト・アイルをモンゴル高原における遊牧経済のもっとも適切な経営主体と評価し、さらにそれが牧民としての知恵が継承される場でもあったとするのである。

その一方で、烏仁其其格はネグデル時期のすぐれた点にも注目する。すなわち長く厳しい冬があるのに、干し草づくりをする習慣がなかったモンゴルの牧民たちにその必要性を繰り返して宣伝したり、同じくゾドに備えるための家畜の避難小屋の設置を精力的に推進するなど、国家的規模での遊

牧保護，牧民支援が行なわれたことを指摘し，一定の評価をしている。

1990年代からモンゴルは自由主義国家となり，社会の様相は激変する。21世紀の最初の十年間が過ぎようとしている今も，その影響はまだ残っているように思えるが，遊牧の現場でも顕著な変化が起こった。都市部の失業者が安易な動機から家畜を持って遊牧を始める，カシミアへの大きな需要を受けてヤギの保有頭数が急増する，良好な草場に牧民が集中し草原が荒廃する，また社会主義時代に国家の援助によって設置された遊牧支援の諸設備——井戸や家畜小屋など——が手入れされることもなく放棄されてしまうなど，多方面に及ぶ矛盾が噴出している。多頭数を保有することが至上目的とされ，家畜総頭数は4,300万頭に達した年度もあった。過大な放牧圧は遅かれ早かれ，草地の荒廃，砂漠化などに直結する。無秩序な遊牧の展開をどう扱うのか，人口の急激な都市集中との兼ね合いをどうするのかなど，モンゴル国が抱える問題は大きい。烏仁其其格は，自由化後，再びホト・アイルが形成されている状況に活路を見出そうとするかのである。

「第3章 『牧業者への助言』の内容の検討」では，①乳利用 ②ゾドへの対処 ③家畜の使役 ④家畜の繁殖，といういずれもモンゴル高原の遊牧にとってきわめて重要な項目について，サムボアの著書の叙述に基づいて分析を加えてゆく。なおゾドとは，モンゴル高原特有の自然災害を意味し，突然起こる気温低下や吹雪などによって数百万頭もの家畜が斃死することもある現象である。百万頭規模の斃死は，まれにではなく発生し，「申歳のゾド」などという表現もあるほどである。

なお著者は，上記4点の項目について考える際に，現代の多くの研究者によるフィールドワークや聴き取り調査の成果にもよく目を行き届かせており，司馬遷の『史記』をはじめとする歴史的記述なども活用して，多角的で丁寧な分析を加えている。その際モンゴル高原の3つの自然的地域ご

とに考察するという視点に立つ。この部分の考察によって、サムボーの著書の内容がいかにかきめ細かで具体的なのか、改めて痛感させられる。

「おわりに」では、この論文全体の振り返りを行ない、ネグデル時代の成果ともいべき国家による遊牧経済への支援を再評価すべきこと、ホト・アイルの持っている可能性にさらに注目すべきことを改めて強調している。

3. 論文の概評

次にこの論文の研究史上における意義を検討してみよう。

まず、サムボーの名高い著作を全訳したことが大きな成果である。同書は、その存在こそ早くから知られていたが、訳業には恵まれなかった。モンゴル語特有の（そしてサムボー独自の語り口という要素もあろうが）回りくどい表現や、主語や目的語が省略される行文が多く、明晰な文章とはいいにくいものであったこと、また文中多くの植物名、動物の特定部位名などが頻出し、しかもその多くは学名が表示されておらず、牧民レベルの素朴な通称で表現されていることもあって、同定作業に多大の困難が予測されること、などが訳出をためらわせる理由といえよう。烏仁其其格は、モンゴル国、中国内蒙古自治区双方で刊行されたその分野の参考文献を渉猟して、力の及ぶ限り正確な植物・動物関係語彙を当てはめる努力をして全訳を行なった。烏仁其其格は、この書の日本語訳がないこと、同書の内容がモンゴル高原の遊牧経済全般にわたり、叙述も詳細かつ具体的であることから、同地の遊牧の実相を理解するためにはその全訳を示すことが必要と考え、この論文の第2部に組み込んだのである。牧民の間に広く普及し、「サムボーの褐色の本」として親しまれていた名著が、中国在住のモンゴル人によって、日本語訳で発表されたことを喜びたい。著者のこの努力を通じて、サムボーの著作の有用性は、半世紀余を経た現在においても

博士論文の要旨および論文審査結果の要旨

意味を失っていないことが確認されたのである。

モンゴルの遊牧を理解するためには、多角的な検討が必要である。空間的には、ハンガイ、ヘルタル、ゴビの3つの自然的地域が検討されるべきであるし、時間的には20世紀の百年間を見れば、中華帝国の支配下に置かれた時期、社会主義の時代、そしてつい最近の自由化実現というように、まったく性格の異なる社会の枠組みがある。遊牧現場もその変化の荒波をこうむったわけだが、こうした問題に立ち向かうには、しっかりした視点から、歴史的空間的な諸状況を冷静に腑分けすることが要求される。そのためには性格の異なる大量の文献・史料（資料）・各種報告書などに取り組み必要があるが、その点でも烏仁其其格は、必要十分な作業をしている。

いままで必ずしも明らかではなかった社会主義時期の遊牧の様相についても、当時の関係者への精力的な聴き取り調査が盛んに行なわれている。日本でも早くから小長谷有紀などが取り組んでいるが、この論文でもそのような成果がよく取り入れられている。

多角的な分析を通じて烏仁其其格がとくに注目したのは、そうした聴き取りの中でもよく言及されるホト・アイルという遊牧を最前線で維持して来た組織であった。ホト・アイルの持つ、遊牧関連知識の継承主体としての可能性を評価している立論は説得的である。

さらに、モンゴル高原の遊牧の具体的な検討も、とり上げられている項目が乳利用、ゾドへの対処、家畜の使役、家畜の繁殖という、いずれも同地の遊牧を特徴付ける重要項目ばかりであり、この問題に対する烏仁其其格の深い理解を窺わせる。この4項目への検討は、サムボーよりの引用、現代のフィールドワークの成果、社会主義時期の関係者の証言など、性格の異なる資料を適切に使いこなして生彩を放っている。

4. 結 論

以上述べたように、烏仁其其格の学位申請論文からは、同人が自立した研究者として必要な豊かな学識や適切な資料操作などの研究能力を十分に備えていることが分かる。研究課題の立てかた、慎重かつ確かなテーマの分析、十分に考察を積み重ねた上での結論の導きかたなど、この論文が示している研究方法は適切である。

モンゴルの牧民たちに広く親しまれてきたサムボーの著書を初めて日本語訳した意義は大きい。同書を通じて、細部が今ひとつ明瞭でなかったモンゴル高原の遊牧についてのさまざまな場面が、いたるところで霧が晴れたように具体的な姿を示している。モンゴル高原に存在する家畜たち、野生動物、草本をはじめとする植物など、サムボーの著書の内容から新たに見出される研究テーマはすくなくないであろう。研究の新たなテーマを導き出すことにもなると予測される訳業の登場を喜びたい。今後、烏仁其其格も自らの研究テーマをそうした方向に向けるものと思われるが、実際にモンゴル高原の遊牧現場に身を置き、今回の研究によって考察したテーマをさらに深化させて欲しいと思う。

学位取得のために必要な学力や外国語能力も、烏仁其其格の修士論文やそれ以降の研究経過などから十分なものと判断できた。この論文についての詳細な質疑応答は、2009年8月4日（火）に、主査原山煌、副査小池誠、副査 Philip Billingsley が行なったが、上記の判断と齟齬するところはないことを確認した。

以上の結果、学位申請者烏仁其其格は、桃山学院大学学位規程第26条に照らして、博士（比較文化学）の学位を授与されるにふさわしい資格があるものと認める。